

創学舎ニユース

No.227

親子の関係(五三)

「愛情不足で育ってきた親は、情緒の成熟や安定を獲得できていないはずがなく、しかし、立場としては親なので、未成熟なまま子育てを行う。そうした親の最大の特徴であり、共通点であるのは、自分の心の安定をはかるために、子供を徹底的に利用するということだ。」ここまで述べて前回は終わったのであるが、再度書いたのは、これが、今後暫くはこの項の主題となるからである。

ところで、この仕事を始めて二十年近くなるが、大勢の保護者や生徒の皆さんと出会って本当に感謝している。さまざまな形で応援していただいたし、支えてもらった。こうした恩は、卒業してしまつた生徒やその保護者の方には、恐らく返すことが出来ないかもしれないが、今通っている生徒達や保護者の方に一杯の協力をすることで許していただこうと思つている。

本題にもどらう。この二十年近くの間、子供達の状態と子供達をとりまく状況はどんどん悪くなつてきたと思つ。「状況」といえば経済状況のことを思いつかべる方もいらっしゃるだろうが、それは第一の要因ではない(これにつ

ては、また別の機会に触れる)。日本経済がどうなつていくのかは分からないが、とりあえずほとんどの人が「今日の生」を支えることができる。私が最も危惧しているのは、大人達の在り様である。大人達の在り様が悪くなつたら、子供達の状態が悪くなつたのである。

さて、御存知のこととは思つが、多くの学校で学級崩壊が進行している。自分の子供が通う学校の状態が悪いとなれば、親としてどれほど心配か、察するに余りあるが、個人の力ではどうしようもないこともある。では、こうなつた責任は誰にあるのか?一つは、教師にある。全員ではないが、かなりの教師が昔の教師ほど、活力や情の厚さを持ち合わせていないように思える(一方で、昔の教師よりはるかに多い仕事を抱え、くたくたになっているのも事実である)。また、一つは親にある。面白くなくても、がまんして聞くこと、人に迷惑をかけないようにすることを子供に教えられる親の数は激減した。加えて、子供達の情緒面に配慮できない親が増えた。行政は、特定の組織や「民主主義的教育」の行き過ぎに責を求める(勿論、その功も罪もあるだろうが、それは他の組織も同じことだろう)。ここでその当否はわからないが、少なくともそこに本質はない。子供を育むべき親(行政に携わる人の多くも親である)や教師が、つまり大人達が何故、こうなつたのかということが最

大の問題なのではないか。(小林)

ある受験記

私もかつては大学受験生であつた。生来の怠惰も原因して二年も浪人した。その後の学業も余りほめられたものではなく、紆余曲折、いやいや人生そのものが紆余曲折…。そんな私の体で覚えた教訓。自分に甘い受験生は失敗する。

一週間もあれば人間はすごいことができる。さあ、よんでくれ。

さて、私は、家が貧しかったので、進学はすべて自力でやるしかなかった。まず、浪人が決定して九州の田舎から上京、浅草の新聞配達所に入る。そこで新聞配達をしながら予備校に通い、捲土重来を目指す。心は燃えていた。実際に入所(塀の向こうではありません)してみると、驚いた。自分と同じ貧乏人が大勢いた。いや、私より貧乏な環境で暮らしてきた奴もいた。そして感動した。いい奴等がそろつていたので。それまでも友人は大勢いたけれども、そのメンバーはそれぞれがまた新しいタイプの人間で魅力的であつた。(彼等とのつき合ひは、今も続いている。)東京という街も新鮮で、見るもの聞くものすべてが珍しく、私の痴的好奇心は休むひまもなかった。また、生まれて初めて給料というものを手にして、自分がつかえるお金が持

てたことも快感だつた。進学のために貯えをしながらも、本が好きな時に買えるようになったことで知的好奇心も満たされつつあつた。仕事はハードであつたが、仲間とのつきあい(新聞配達所の寮で毎日宴会だつた)、音楽・読書・イベントと、私の生活は満ち足りていた。ただ一点を除いて…。そうただ一点。

いつしか、予備校から足は遠のいていた。学業は停滞していた。毎日の勉強時間は一時間位、まずいまずいと思いつつも、何とかなると一方で思つていた。(模試の成績はそんなに悪くはなかった。)

時々、田舎に残っている母と祖父と弟のことが思い出された。彼等にとって私は希望の星であつたのだ。その時は、「申し訳ない」と思つが、しかし、毎日の楽しい生活におぼれた。

結果、またも浪人。ショックだつた。「まさか。」と思つた。しかし、振り返つてみれば、当然の報いだったのかもしれない。甘いことばかり考えて、自分を律することができなかった。だから…。母には手紙を書いた。つらい手紙だつた。そして、母から…。母からは電話が来た。母は、つとめて明るい声を出そうとしていたが、途中から涙声が混じるのが分かつた。怠惰な生活を送つてきたことを本当に申し訳ないと思つた。

一浪目の生活が始まつた。バイト先を移り、

その寮に住み込んでの受験勉強が始まった。今年は通信添削にかけることにし、勉強時間も増やした(それでも四時間位)。その寮での生活も快適だった。今度は、絵かきやイラストレーターといった、また別のタイプの友人が増えた。そしていつしか、私の部屋はみんなのたまり場になっていった。よく人が泊まりに来た。バイトからもどると見知らぬ男が部屋にいたこともよくあった。「さんの紹介です...」バイト先の人達もみな良い人で、お客さんも優しく、善意にあふれていた(私にはそう思えた)。一浪目にも増して刺激的な毎日だった。満ちたりていた...。ただ一点をのぞいて...

再び勉強がおろそかになっていった。それでも私は今度こそ何とかなると思っていた(模試の成績は維持していた)。そして新しい年が明けた。勉強は進まず、それでも何とかなると思っ、バイトと読書、他人の金で飲む宴会と友人とのつき合いが一日の大半を占めた。突然、電報が届いた。一月十五日(祝)。成人の日ということをおぼえていた。開けてみると母からだった。「成人おめでとう。自分の夢に向かってがんばれ。」涙があふれた。とまらない。私は母のこともしばらく忘れていたのだった。「申し訳ない」と心から思った。自分が情けなかった。後悔した。精一杯生きてきた母の顔が背中が思い出された。私は決心した。今日

からがんばろうと。

普通の人はこちらでがんばるのだろう。しかし私はやはり怠惰な人間だった。多少勉強時間は増えたものの予定したことの三分の一も進まなかった。そして、まだ何とかなると思っていた。そして本番...

結果。第一志望不合格。わが目を疑った。こんなはずではなかった。こんな思いをするために上京したのではなかった。今までのことが頭の中を駆けめぐった。情けなかった。本当に情けなかった。後悔していた。今度こそ後悔していた。

それからである。私が本気で勉強したのは。死にもの狂いでやった。一日十八時間。次の受験まで二週間弱。母の電報を机に置き、友人や恩師の手紙をそのそばに置き、がんばった。今までやったものを片っぱしからやり直した。過去問も二回解いた。勉強しながら、涙がこみあげてくることもあった。それでも歯をくいしばった。自分にこんな力があるとは思わなかった。いつしか自分に感動していた...

そして、とりあえずの春を迎えた。新しい生活の始まりだった。

ここまでは、二〇〇〇年一月二十八日号の再掲。受験には、その人固有の苦しみがあること、そして、勇気を出して立ち向かわないといけない時があることを分って欲しくて載せた次第であ

る。受験は、他人が何といおうと、本人にとっては孤独な戦い。親や友人に相談しても、自分の気持ちを本当に分ってもらうことは難しい。そして、それは仕方のないことである。また、ある意味、それでよいのである。ただ、私達講師の中には、私を含めて数多くの失敗をしてきた者が多い。その失敗の多さ故一般の人より、キミ達の気持ちを少しは余計に理解できるかもしれない。そう思って、日々教壇に立ち、キミ達を迎えている。もし、何かキミ達の日々の歩みを妨げるようなことがあれば、是非相談してほしい。自分が苦しんだからこそ、私達は、キミ達の応援者である。そして同士である。(小林)

教育「名言」紹介(2)

人間の進歩を印す思想と行為を知ること
は、いく世紀をも通じて脈打つ人類の偉大な
心臓の鼓動を感じるにすぎません。

出典 ヘレン・ケラー、アメリカ一八八〇
一九六六『ヘレン・ケラー自伝』

解説 一九〇〇年の秋、「三重苦の少女」ヘレン・ケラーは、念願だったハーバード大学ラドクリフ・カレッジに入学する。この本の執筆時には、ヘレンは二歳、このカレッジに在籍していた。「教室は偉人と賢者の精神に満ちて

いるように見え、教授は叡知の権化のように思いました」と言ったように、希望に燃えて入学したヘレンであったが、すぐにその希望は満たされないことを知る。大学には「たしかに偉人賢人はいます。しかしミイラ化しているように思えるのです」と文章は続く。単なる記号やラベルとしてではなく、世界の生き生きとした律動的な生命との鮮烈な出会いによって言葉を学んだヘレンにとって、大学の授業でなされる文学の解釈や歴史の知識の羅列は、ほとんど死んだ言葉の集積であり意味のないものであった。しかしヘレンは絶望したりなどしない。このこともまたヘレンを成長させていくのだ。「知識は力なり」との言葉に対して、「むしろ知識は幸福です」とヘレンは断言する。そして見出しの言葉が続く。この「人類の偉大な心臓の鼓動」を感じることに幸福でなくて何であろうか。ヘレン・ケラーの自伝が読まれてきたのは、「奇跡の瞬間」が感動的だったからでもあるが、その後の彼女の生涯が、創造的に生きるとはどういうことを示してきたからにほかならない。

(アガトス教育研究所)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、「希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。」